

新産業創出調査特別委員会会議記録

新産業創出調査特別委員長 郷右近 浩

- 1 日時
平成 25 年 4 月 17 日（水曜日）
午前 10 時 02 分開会、午前 11 時 46 分散会
- 2 場所
第 2 委員会室
- 3 出席委員
郷右近浩委員長、高橋孝眞副委員長、田村誠委員、大宮惇幸委員、五日市王委員、
柳村岩見委員、工藤勝子委員、関根敏伸委員、後藤完委員、飯澤匡委員、久保孝喜委員、
佐々木茂光委員
- 4 欠席委員
なし
- 5 事務局職員
米内担当書記、伊藤担当書記
- 6 説明のため出席した者
一般社団法人東北経済連合会 産業経済グループ部長 有原 常裕氏、政策地域部副部長
兼政策推進室長兼首席 I L C 推進監 大平 尚氏
- 7 一般傍聴者
なし
- 8 会議に付した事件
 - (1) 調査
 - ① 国際リニアコライダーの東北誘致に向けた県の取組状況
 - ② 国際リニアコライダーの東北誘致への期待と取組について
 - (2) その他
次回以降の委員会運営について
- 9 議事の内容

○郷右近浩委員長 おはようございます。ただいまから新産業創出調査特別委員会を開会いたします。

委員会を開きます前に、当特別委員会の担当書記に異動がありましたので、新任の書記を御紹介いたします。

伊藤担当書記でございます。

○伊藤担当書記 伊藤と申します。よろしくお願いたします。

○郷右近浩委員長 それでは、これより本日の会議を開きます。本日はお手元に配付いた

しております日程のとおり、国際リニアコライダー東北誘致への期待と取組について調査を行いたいと思います。

本日は、講師として一般社団法人東北経済連合会産業経済グループ部長の有原常裕氏をお招きいたしておりますので、御紹介いたします。

それでは、有原先生。

○**有原常裕講師** 皆さん、おはようございます。東北経済連合会の有原と申します。ILCのほうを担当させていただいています。本日は、貴重な時間をいただきましてありがとうございます。よろしくお願いいたします。

○**郷右近浩委員長** 有原部長の御略歴等につきましては、お手元に配付している資料のとおりでございます。

本日は、有原部長の御講演に先立ち、当局から国際リニアコライダーの東北誘致に向けた県の取組状況について説明を求めます。

○**大平政策地域部副部長兼政策推進室長兼首席ILC推進監** それでは、私からILC東北誘致に向けた取組について御報告いたします。1ペーパー、本日添付してございます。ILCの東北誘致に向けた取組について、こちらの資料に基づきまして御説明いたします。

まず、現状と課題であります。昨年12月にILC設計報告書が完成いたしました。その後、ことし2月にはILC建設に向けた新組織、LCC・LCDとっておりますけれども、リニアコライダー・コラボレート、あるいはリニアコライダー・ディレクトレートという組織ができております。さらに、超党派議連が2月に再結成されています。会長は、自民党の河村建夫会長で、会長代理には民主党の大畠先生、あと、副会長には本県からは鈴木俊一先生等が入っています。

(2) であります。ILCの国内候補地の絞り込みについてはILC戦略会議というものが物理学者の中でございまして、そのもとでILC立地評価会議というものが今年の1月にできております。東北と九州に、科学技術上の評価、社会・経済上の立地評価という項目が示されてございまして、これらに基づいて資料を提出しているところでございます。

具体的には、科学技術上の評価というのが地質とか、あるいは重い機材とか大型機材を運べるかとか、どこから陸揚げして、どういうルートで運ぶとか、そういう非常に細かいデータが求められておりますが、大半のデータは提出済みでございます。最後に申し上げますが、ボーリング等がまだ終わっておりませんので、そちらが4月30日の締め切りになってございます。

さらに、社会、経済状況でありますけれども、これは、要は研究者受け入れ環境のことでございます。こちらが先週の金曜日に項目が正式に示されまして、締切りが5月10日ということになります。いずれ非常にデリケートな問題がございまして、といいますのはキャンパスの確保をどうするかとか、候補地を出してくださいということで、まだ我々がオーソライズしていない段階でありますので、全てこれは立地評価会議限りということになってございます。将来的にも特定の地名が出てくることは公表しないという前提での提出

を求められているものであります。つまり、例えば土地の買い占めだとか、売り惜しみだとか、そういうものも想定されるわけでありまして、そういうことがありますので、これについては非公表事項となつてございます。5月10日までに県、東北大学、あるいは東北 I L C 推進協議会、宮城県などなどの協力を得て資料を作成いたします。これを出すことになつてございます。そのような状況にあります。その後、評価結果を踏まえて正式な最終的な判断が行われると。これは我々の得た情報では7月ということになってはいますが、参議院選の後になるのではないかというお話でございます。

(3) であります。欧州高エネルギー物理学将来構想素案というものができております。これでは、表現とすれば日本が I L C のホストになることを歓迎し、欧州が参加したいと強く日本政府からのプロポーザルを期待するということでもあります。これは、単なる物理学者の集まりではなく、欧州の E U 政府等も関与するということになります。この正式決定が6月であります。

さらに、アメリカでも同様の構想というものがあつて、それが今準備にかかつていふというものであります。その中でどういう表現が盛り込まれるかというのを注目したいと思つております。いずれ諸外国からは、日本における建設の期待等々が表明されているところでもあります。

(4) であります。安倍内閣総理大臣の施政方針演説で選択するということが盛り込まれております。さらに、代表質問でも質疑があつたということ。下村文部科学大臣が記者会見で我が国としてぜひ日本国内で誘致したいというふうに思つております、また、今年度の前半に政府として積極的に関係諸国に働きかけながら準備計画について考えていきたいというふうに、今準備しているというような表現がございます。さらに、麻生財務大臣の予算委員会での答弁におきましては、I L C についてこういったものに基本的に取り組むという姿勢が人類の進歩、進化につながっていくものだと思つております、私としてはぜひこういったものを日本に取りたいという意欲を持っております、というような表現であります。というところではありますが、政府としての正式な、まだ誘致の意向ということにはなつてございません。

これらを踏まえまして対応の方向性であります。まず北上サイトの国内候補地の一本化、勝ち残るということでありまして、そのために例えば活断層もなく安定した地盤であるということ、あるいは大型機器の輸送も容易であることなどを訴えていくと、そういうデータを提出したいと思つております。機器の輸送については提出済みであります。活断層については最後にまた述べたいと思つております。研究者居住環境につきましては、立地評価会議のスタンスは公的支出を最低限に抑えるということがありますので、民間資金の導入でまちづくりができるというようなことをある程度盛り込んでいきたいと思つております。さらに、安全、安心で魅力的な地域であるということも訴えながら、社会、経済上も総合的には福岡と隣接する九州と同等程度である、それ以上であるということも立地評価会議に示したいと思つております。一方、九州がどのように評価レポートというか、報告

書を出しているか全く情報は閉じられておりますので、我々は知る由はございません。ただ、我々としては自信を持ったデータを出したいと思っております。

さらに、(2)であります。国内候補地が北上サイトに絞られた場合は次の調査、いろいろな受け入れに向けた調査が必要になると思っております。例えば自然・社会生活環境の把握、あるいは環境に対する影響調査なども地元としては行いたいと思っております。これは候補地一本化の状況を見ながら考えていくべきだと思っております。外国人研究者の受け入れに向けた社会環境基盤整備の具体的なロードマップ、例えば10年後に来るという想定をしてよいのかとか、あるいは建設段階からある程度来るのかというようなこともらみながら社会基盤、インフラとか、あるいはソフト施策のロードマップの検討を進めたいと考えてございます。さらに、県内及び東北各県において幅広い年代への周知啓発や機運醸成の活動展開を強化してまいりたいと思っております。

そして、(3)であります。I L C誘致の方針を政府として決定してもらうように、そして関係諸国に対して日本として誘致の意向があることを正式決定、表明してもらえようように誘致活動、要望活動を強化していきたいと思っております。さらには、オールジャパンの体制で各界から政府に働きかけをしていただくということで、経済界との連携も図ってまいりたいと思っております。特に東北I L C推進協議会、本日御出席の有原部長の所属しているところでありますが、そちらのほうとの連携が重要と考えてございます。

3番目であります。県、関係機関の取組で、I L C立地評価会議への資料提出が、現在どのような状況になっているのかということですが、最終的な地質調査、これは活断層の候補となるような、リニアメントという表現をしておりますが、そういう地形が間違いなく活断層でないということを歩いて調べるという意味であります。具体的にはもう踏査は終わっておりますが、データの取りまとめを現在行っているところであります。東北大学が行っているボーリングでございますが、地質調査が昨日終了いたしました。今から具体的な分析作業が入りまして、4月30日の締切りまでにこちらの上の地表踏査結果とあわせて提出することとしております。あとは、研究者受け入れ環境につきましては、東北I L C推進協議会に国際都市の分科会がございます。そちらのほうで具体的な検討も行っております。そちらの報告書を参考としながら立地評価に対するデータ整理を現在鋭意行っているところであります。

さらに、I L C建設・外国人研究者受け入れに向けた取組については、自然環境等の基礎調査、これは環境アセスメントの前段に当たる調査であります。それらについては、本年度取りかかりたいと思っております。それと岩手大学と連携した外国人子弟教育環境の検討、例えばということですが、岩手大学の教育学部などと意見交換をしながら、岩手大学でも附属インターナショナルスクールという話も一部の方からお話はありますが、具体的な検討はまだこれからであります。いずれインターナショナルスクールというのは、非常に大きな課題になると思っております。本日の新聞にも掲載されておりますが、あした知事が幕張インターナショナルスクールを視察するというのもそれらの動きであります。

岩手大学からも同行していただきますし、東北 I L C 推進協議会からも東北経済連合会の副会長に同行していただくことになっております。さらに、先ほど申しましたようなまちづくりのロードマップに加えまして、産業集積に向けたロードマップについても検討してまいりたいというふうに思っております。

要望活動につきましては、東北 I L C 推進協議会のほか、岩手県国際リニアコライダー推進協議会、あるいは東北の地方六団体、地元一関市、奥州市などなどと連携をとりながら周知活動と要望活動を行ってまいりたいと考えております。以上であります。

○郷右近浩委員長 どうもありがとうございました。ただいまの御説明に対しての質疑ですけれども、後ほどあわせてお願いしたいと思っておりますので、皆様御了承いただきたいと思っております。

それでは、有原部長より国際リニアコライダー東北誘致への期待と取組についてと題しまして、本年7月頃とされる国内候補地の一本化に向け、実績に優れている点等を考慮した場合、現状においてはこの北上山地への誘致への期待が膨らむ一方、学術研究都市としてのまちづくりや外国からの研究者及びその家族等の受け入れ態勢整備など、今後本県が取り組んでいかなければならない課題などに関するお話をいただくこととなっております。

有原部長様には、御多忙のところ御講演をお引き受けいただきましたことに、改めて感謝申し上げます。これより講師のお話をいただくことにしますが、後ほど有原部長を交えての質疑、意見交換の時間を設けておりますので、御了承願いたいと思っております。

それでは、有原部長様、どうぞよろしくお願いいいたします。

○有原常裕講師 改めまして、東北経済連合会の有原と申します。よろしくお願いいいたします。NTTのほうから出向しております、2年ぐらい前なのですが、そのときに今ちようど出ていますけれども、東北加速器基礎科学研究会というのが立ち上がりまして、そのときから担当させていただいております。きょうは、このような機会をいただきましてありがとうございます。お話をしてくださいと言われたのは、誘致への期待ということと取組ということですので、それに沿ってお話をさせていただきます。

本日の内容は、これまでの取組ということと、あと2番の立地の意味と期待というところがこれから I L C を誘致して推進をしていく上で非常に大きなものになると思っております。

それから、あと3番以降につきましては、I L C を核とした東北の将来ビジョンということで、これまで検討してきた内容を御説明させていただきまして、最後に東北実現ということの内容になってございます。なお、内容的には、北上山地に決まったというふうな前提でお話をさせていただきますが、よろしくお願いいいたします。

まず、これまでの取組なのですが、平成21年の4月に東北の研究会というものを東北の31会員ということで立ち上げさせていただきました。この中で取り組んだものがこの国際学術都市のあり方ということで、約10カ月をかけまして研究者の方からお話をいただいたり東北の現状を探ったり、そういう中で何が必要かという実現可能性というところを調査研究ということで、ここは勉強したというスタンスになると思っております。

その中で浮かび上がってきたものがここに書いてある四つのものでございまして、住宅の確保、これは研究者の方が来られたときに円滑にその研究に打ち込めるということを考えますと、生活基盤がしっかりしているということになりますので、住宅、子弟教育、それから日常の医療の関係、そういうものがしっかりとしてメンテされていないとなかなかいい研究環境にならないということがわかりました。

この医療のところは特に、日本の場合には自分でどの医療機関に行って何を治してもらうかというのを御自分で決めて選んで行くということになるのですが、海外においては家庭医制度のような形で、かかりつけのお医者さんがございまして、そこに行き、ではどこに行ってくださいということで御案内をいただくというふうなことがポピュラーなそうございまして、ILCにつきましてもそのようなことを考えなければならないということでございます。

それから、福祉・ボランティアと書いてございまして、研究者の配偶者の方が来られたときに、地域との接点を持ってそこで充実した生活を送っていただくというふうな趣旨で、家庭に閉じこもって孤立しないような、そういう環境をつくらなければいけないということでございます。いずれにしても、コミュニケーションの充実が必要ということになりまして、地域を挙げてそういうサポートをしていくということが大事ではないかということでございます。

研究会としては、昨年の7月に協議会に改組いたしまして、これまでの研究中心の活動から東北へのILCの推進を主眼に置いた活動にするということでございます。この中で打ち出したのは、震災がございましたので、東北の復興ということで、復興の先にある東北を見据えた将来像を描くということでビジョンを策定させていただきました。

そのビジョンの内容でございますが、まず策定の狙いとしては、大きく言うと我々地域としては最高の研究ができる環境を提供することによって東北に来ていただく環境が整うと。ここでこういう環境を提供することによって、世界の中の科学、技術、それから国際交流の場の形成がされていくということになります。もう一つは、これは我々が望むものですが、産学連携とか技術、それから人が交流する場をつくり出すということによって、東北の産業、経済、地域が活性化していくということ、これは取り込もうという意思でございます。

内容的には、四つのパーツがあるのですが、大きく言うと、このところにかかわりませんが、ILCという日本にとっても世界でも初めてのものですから、新しい国際エリア構想ということになると思います。それに計画の当初から地域が参加するというふうな非常に重要な意味があるということで、ビジョンの中では当面の具体策をお示しして、それをみんなでディスカッションしていきましょうということでございます。

内容的には、ILCをてこにして東北の復興、それから将来像、またこれは東北だけの話ではないものですから、日本再生につながるようなモデルケースにならないかということと、あとは多くの方が理解していただける、共感していただけるビジョンにしようとい

うことをごさいます。それによって I L C 誘致を国が意思決定する後押しになればなという
うことのでつらせていただきました。

2 番でございすが、まず I L C 立地の意味ですけれども、ここは端的に言いますと人と
と技術が集積するということに尽きると思ひます。それをちょっとひもといひますと、
一つが国際プロジェクトであるということ。世界での国際プロジェクトは三つと我々
教えていただきまして、一つは実現している国際宇宙ステーション、二つ目がフランスの
カダラッシュに建設中の I T E R でございす。三つ目が今計画中の I L C ということ
です。

三つ目のこの I L C は、実は上の二つとはちょっと違ひまして、宇宙ステーションはア
メリカが始めて、それを国際的にみんなでやろうというふうに変化したと、それから I T
E R はトップダウン的にロシアとアメリカの大統領がやろうということになって、それで
どんどん進めていったと。I L C については、世界の研究者が自らみんなで持ち寄ってそ
ういう計画を練りに練って、ずっと温めてやってきているということ、どちらかとい
うとボトムアップ的にみんながやっているということ、これの実現が新しいモデルケース
になるのではないかというプロジェクトであるということ。

二つ目が、東北にとっては国際的な地域になるということにございす。これは日本に
とっても国際機関というふうな位置づけになると思ひますので、本格的な国際機関として
初めてのものが日本に誕生するということになりまして、最先端科学、それから情報発信
の拠点、国際交流も含めてということ。

そういう意味合いのある I L C への期待なのですが、これは端的に言ひますと東北の未
来を創造するということにございすが、まず一つ目が国際プロジェクトから得られるも
の、ここは精神論的なことになりすけれども、まず立地環境を提供する地域、東北とし
ての誇りになりす、我々のそういう思いになりす。それから、参加国との協力協調
関係が築かれていくという、あるいは世界が我々にもたらしてくれるような刺激がいい材
料になりすので、これまでになかったような多文化共生ですとか、あるいは若手のグロ
ーバル人材の育成ですとか、そういうさまざまないい効果が出てくるということになる
と思ひます。

二つ目が立地機関としての重みです。地域の重みというものがさらに増してくるのでは
ないかと思ひます。ここは世界の目が注がれる地域になりすので、我々もふだん地域の
目先のことしか見ていないのですが、世界から見られますので、世界へ逆に目を向ける機
会にもなるということになると思ひます。それから、国際的な地域としての身構えとい
うことで、交流とかも盛んになってきますので、日本としてのよさ、地域としてのよさとい
うものが、実はふだんは気がつかないところも外国人の目から見るとよいところに見える
というようなことからすると、再発見もあるのではないかと思ひます。あとは、ここが一
番大きいところになりすけれども、視野が広がりますので、特に若い方々、中高生の方々
の世界を見る目とか技術とか科学を見る目、視野が広がってきて、いい刺激になるだろ

と思います。

この1、2については、ちょっと精神論的な話になりますが、(3)は特に技術が非常に期待が持てます。期間も30年以上、建設で10年と運用で20年という長いものですから、非常に継続した技術の効果が発揮できるでしょうということでございます。

一つが産業への技術革新効果ということで、ここに書いてありますが、いろいろな分野において新しい技術とか、そういう産業まで波及するようなことが期待できます。加速器、測定器から始まりましていろいろありますが、特に今注目を浴びているのは医療とか創薬のところは、すぐさま加速器技術が技術移転されて、社会の役に立つものになっていくだろうということが大分はっきり見えるようになってきたということでございます。

それから、二つ目が地域経済の活性化、誘発効果ということで、さまざまな方々の交流とか活動を活発にしますので、そこから常にあるものの活性化もそうですけれども、新しいものを誘発して、そこで活性化に向けた相乗効果というか、ボリューム、スケールアップが図られるのではないかと思います。

それから、三つ目が人が育つということと、世界とつながっていけるようなものになると。これは普通にやっていたらそうはならないのですけれども、例えば技術の集積センターをアジアとつながる中でテクニカルセンター的にやっていくということで、アジアとの連携が強くなるようになるというふうなことでございます。

四つ目は、これはちょっと夢の先の夢なのですが、CERNでインターネットのベースが開発されたというようなものが多分何かしら起こるのではないかと大きな期待がありまして、それは言ってみれば21世紀のイノベーションに匹敵するようなものが出るかなという期待があります。それは技術だけではなくて、東北を見れば地域の文化ですとか風土とか、そういうことも含めて我々の生きざまが変わるようなルネッサンスになるのではないかと期待があります。大きな期待がございます。

3番がILCとはということなのですが、ここは皆さん御存じのことで詳細は割愛いたしますけれども、ポイントとなるのはILCはヒッグス粒子を詳細に研究することなのですが、現在の宇宙の姿というのはヒッグスがあるためにこういうふうになっている。ここにある物質などもヒッグスでつかまえられて、そこにとどまっているために形をなしているわけなのですけれども、ヒッグスがなければ光みたいに飛び散ってしまって、形もつukられないということのようです。物に質量を与えているということは静止エネルギーがあるということなので、ヒッグスでつかまえられて形づくる。ヒッグスがなかったら、もうみんな全部ばらばらになって、光の速度でみんな飛び散り、そういうところの状況がわかってくるというようなすごい研究がありますということで、情報発信の基地になるのだということでございます。

4番が実際に誕生する国際エリアでございますが、まず一つ目が国際研究所周辺の拠点ですけれども、五つの分類で考えてございまして、上の三つがILCによってつくられるものということでございます。科学でありますと世界のオンリーワンの研究拠点でござい

ますし、技術的にも最先端の技術が集まりますので、そこからイノベーションが起きると世界へ波及していくと、それから情報もさまざまな情報が発信される基地になりますし、情報の量も格段に大きいということでございます。

下の二つのところは、これは地域としてつくらなければなかなかでき上がらないものです。上の三つは、ILCが来ることによってある程度でき上がってきます。下は、地域が一所懸命つくるといことです。交流は、グローバルコミュニティと書いておりますけれども、世界の人々がここで交流できる場を提供すると、交流しやすいような環境を提供して、その中で交流がたくさん起きると生活環境もそれに相乗的に住みやすい環境になると。住みやすい環境になると、また交流も盛んになるということになります。ここの生活、交流がしっかりでき上がると、世界の優秀な研究者の方もここに来て研究をするという、そういうモチベーションが高まりますので、上のほうも発展していくということで、上と下が相互に関連し合ってILC研究所がどんどん大きくなっていくところを目指そうということでございます。

それから、これは東北全域を書いたのですが、実はILCが来たときに一気にすばらしいものになるかという、なかなかそうはいかなくて、時間の経過とともに形がつけられていくというふうに考えてございます。最初は中心範囲のところで起きた国際化の変化が地域の盛岡から仙台までのこういう少し広めのところに広がって行って定着して、最終的には広域の東北全体、新潟も含めた全体に広がっていくと。さらに、日本全体とかアジアに広がっていくということになっています。そのようになっていくというか、導いていくことが一番いいやり方ということだと思います。

少し細かくなりますが、中心範囲の拠点のイメージですけれども、そこは5個の拠点のイメージを持っておりまして、まず中核の研究拠点、メインキャンパスですが、これは衝突点近傍と、それから交通アクセスがいいところのどこかにつくられるだろうということです。ここは、研究本体とか会議、交流などが行われるメインのところになります。

あとは、サテライトキャンパス、計測実験拠点は、これは衝突点そのものの近くにできるというものでございます。

それから、ここの三つ目の先端産業集積拠点、ここが東北の産業とか地域発展の核になる部分で、エンジン役になる部分でございます。これは自動的につくられるものではないので、東北の我々が知恵を出し合って何とかつくり上げていくということになります。後ほど詳細は御説明させていただきます。

それから、世界中から研究者、技術者がやってまいりますので、交流居住区というようなことで、住宅環境の整備というものも必要になります。

あとは、コミュニティセンターというのは、これは機能として必要ですけれども、医療とか育児、教育、さまざまな日常の生活をサポートする機能として、少し大き目の範囲の中に必要な機能が存在しないと、なかなか交流も生活も円滑にいかないということで、これをどうつくるかで魅力ある地域になっていくと。魅力あるというか、研究者にとって非

常にそこはいいところだと思えるようなものをつくることによって、どんどん I L C 自体も成長していきますし、それに伴って地域も発展していくということになると思います。

メインキャンパスの想像図でございますけれども、どこにできるかは別にしまして、ここに書いてあるようなメインの機能が図られるものでございます。恐らく新幹線とか交通アクセスのいいところになるのではと思います。これは、MEYRIN、先週岩手県さんで行ってこられたと思いますけれども、その地区を参考に我々も設計をさせていただいております。

それから、関心の高い先端産業集積拠点、科学技術産業パークと仮称で呼んでおりますけれども、これは東北地域としてつくり上げるものになります。機能的には、今考えているのは研究開発機能、これは I L C 運用後の技術を維持、メンテしたり、新しい技術を開発したり、バージョンアップしたりするための機能がありますので、そこと連携をさせるような形で、この集積拠点を形成できないかというふうに考えております。

こちらの下のほうは、民間とか公的研究機関とか、そういうものが混在した形でいいと思いますけれども、さまざまな機能ができるようなものをつくり込んで、そこに技術と人が集まってくるような地域を形成することによって、そこから I L C の技術が産業に移転して、社会にとって役立つような新しい製品なり機能なりが出てきて、我々も恩恵を受けますし、I L C に投資したお金が社会に恩恵をもたらすというリターンの部分になります。

ここは、これから詳細の設計をする必要がありますけれども、I L C の技術と、それから産業のほうで欲している技術と、それを仲介する機能とか、そういうさまざまな要素がかみ合わさったものをつくらなければならないものですから、各県にあります産業技術センターですとか、公の研究機関、開発機関、機能ですとか、あるいは大学とか研究機関の出張所のようなそういう役割ですとか、あるいは企業さんの技術開発をする人たちが集まることができる場所と、そういうさまざまなものがここに集約できるような環境を整えているということが重要になると思います。そういうことを設定をしてつくり上げるということをしないと、これは自動的にでき上がるものではありませんので、東北としてどういうものをやりたいかというある程度意思を固めて、それに合ったものをつくっていくということになると思います。

これは中心範囲を絵にしたものでございますが、左側に新幹線、高速道路、右側に三陸道とか、沿岸でございます。衝突点の上にはサテライトキャンパスがあつて、こちらの新幹線沿いに中央キャンパス的なもの、メインキャンパスがあつて、それを取り囲むような形でコミュニティセンターとか産業技術センターが配置される。この辺の設計はまだこれからということですが、様式的に言うところのようなイメージになります。

中域交流範囲の形成と社会基盤ということなのですが、これはここ盛岡から仙台までの間と、沿岸も含むエリアであります。社会基盤的な要素としては、九州に比べて基盤が弱いのではないかというふうに言われていますけれども、九州の脊振のほうを私も実際に見させていただきましたが、それほど言われるほど劣っているということではなくて、意外と

そこそこ必要な機能が整っているということは言えると思います。大船渡線も走っておりますし、新幹線も近いですし、高速道路もある。あるいは沿岸のほうにも道路がありますし、横に道路もありますし、縦にもあります。そういう面でいくと脊振のほうの道路網よりはずっとこちらの道路のほうが数も多いし、内容的にもいいというふうに思っております。なので、余り気にすることはないのではないかと、もうこちらのほうがすごくいいのではないかと私は思っています。

ただ、世界から見ると、なかなか東北のそういう現状を知っていただけるかというところではなくて、多分東京の人とかも九州の人でも東北のイメージはそんなに道路があるとか近いとかということは思っていない人が多いと思うのです。そういう面では、そういうところをPRする必要があると思います。物すごいベストな基盤から見ると、確かに基盤的には弱い面もありますが、最小限そこそこいけるというような観点からすると、もう十分なくらいだと。空港もありますし、道路もありますし、東京とも陸続きで直結していますし、新幹線を使えば人の移動は何ら問題がないと。あとは機材の移動についても、輸送等についても十分対応できますし、そういうことからするとこれからは今あるものを使いつつ、機能向上を果たしたり、少し新たな整備、これは導入開始からすぐに整備するというのではなくて、徐々に交流が盛んになってきて需要が増えてきたらそれに伴って整備をしていくと、そういうことでも十分いいと思いますが、新たな整備も必要になるということで、できれば今あるものでの利便性の向上などは少し、ということはやや必要かなとは思っています。

それから、情報通信ネットワークは現状ではちょっと間に合わないの、相当大きいものをつくる必要もありますし、小さいものをつくる必要もあるのではないかと思います。ここは大容量の情報飛び交うということからすると、多方の収益が見込まれます。

あと社会生活基盤を支える供給処理も、少しこれから計画的に整備していくということが必要になると思います。

今の中核を図示するとこういうふうになりますが、こちらのほうに盛岡、仙台が大都市がありまして、中に中規模の都市があります。こちらにも都市がありますということになりますと、居住区としてはこここのところにも摺沢とか大東とか十分住める環境もありますし、下のほうに行くと千厩とか川崎もあります。そういうことからすると、この範囲の中に居住できるそういう環境が既にありますので、そこに例えば住宅を提供するのであれば、日本人の方に提供する住宅と外国人の方に提供しようとする住宅はちょっとサイズとかやり方、部屋の中に例えば備えつけのものをしっかり用意しておくとか、身軽に来て帰っていただけるようなスタイルにするというようなことを少しアレンジした形で意識してやらないと、そこはなかなかお互いのメリットにならないと思います。外国人向けに少し工夫をした住宅を提供してあげることが必要になると思います。そういうことをすれば、この中で住宅の供給環境としては十分いけるのではないかと思いますし、ここの交通アクセスの距離感というか、時間感覚も全然問題のないくらいの近さだと思います。あと都市をお

好みの方は、盛岡とか仙台とかにありますので、距離的にも同じぐらいの距離になりますから、そういうことからすると環境としても申し分ないというふうに思います。

そういうことで、ライン上の衝突点近傍にそういうエリアがつけられて、最初は何もないところから来るので、ゼロからですから確かにつくらなければならないですね。そこから始まって環境になじんでいただいたら、地域に溶け込んでいただくという、そういう流れで地域として対応していくということが必要かと思います。

ただ、移動手段も、今あるものそのままではちょっと利便性が不足しているので、少し接続性とか利便性を上げるということと、例えば高速道路で通勤というか、移動される方にしてみると日本の高速道路の料金は高いので、ここは何とかしないと、海外では無料という感覚でおられる方も多くいらっしゃるの、そういうところはちょっと気になるころです。

あとは、空港の利活用というようなところを真剣に考えて、ここからの接続性とか直行バスを走らせるとか、そういうことを最初からではなくて、ここに集まる交流人口というか、流動人口のボリューム感とか需要が増えてから事業として成り立つ範囲でそういうものをつくっていくということによって整備されていくというふうに思います。

ここはちょっと新しい考え方ですが、I L C—T o h o k uの形成です。海外から見ているので、漢字よりはこちらのほうがなじみやすいかなということをつけています。交流エリアの拠点ということで、盛岡、仙台がそういう拠点の中心になるだろうと。研究施設に隣接していますので、いずれにしても都市機能というのは最低限必要になりますから、そこで行われる国際会議ですとか、いろんな交流の機能、それから研究施設とリンクして交流したり、生活も含めて機能しております。家族の方の日常の生活は自然環境の中で生活を好まれる方も都市機能というものもぜひ必要になりますし、盛岡、仙台だけではなくて、青森、秋田、山形、福島、そういう遠いところに出かけて観光地に行くとか、いろいろ出てくるという状況です。

それから、求められるものの一つですが、国内もありますけれども、海外から初めて来られる方は、来られたときにスムーズに目的を達成できるようなサービスというか、そういうおもてなし的な部分、対応が必要になると思います。一体どこにどう行けばどんなものがあって、どうできるのかというようなことが初めており立ったそういう駅で必要なものが手に入るというふうなものを提供していくということからすると、例えば仙台空港とかから来た場合には仙台駅だとか、こちらへ来ると一関駅とか、水沢江刺駅とか、そういうところに来たときにしっかりと、どこにどんなものがあってどうするかというのがわかるというものを備えておくし、そういうサービスをやるというようなことをやらないとトラブルのもとというか、円滑にいかないと思います。そういう拠点活動も必要になるということ。あと大学の学術研究の拠点になるということになっております。

これはちょっと息の長い話で、大分先のことになりますが、広域に広がっていくということで、どちらかという今震災復興に向けていろいろなプロジェクト、拠点の計画が走

っておりますけれども、それはほとんど国際的なつながりというか、世界とのつながりの中でそういう拠点計画、プロジェクトが走っておりますので、ILCだけで完結するのではなく、そういう新しい拠点との連携、仕事上の連携だけではなくて、例えば世界からILCに来られた方が、ILC以外でも国際プロジェクトはこういうものがありますよということで、そういうところと少し見学なり交流なりできるように連携していく、あるいは観光的に回れるルートとしてそういうものを設定して提供していくということで、点としてILC拠点が活性化していけばいいということではなくて、東北の中で面的にそういう活性化を広げていくというものをみんなでやっていきましょうということによって東北全域が活性化していくということにつながるのではないかというような趣旨でつくっていったらいいと思います。特に福島のところは再生可能エネルギーだとか、医療の拠点にもなっていますので、注目されているところだと思います。

図に示しますとこういう形で、ここから全域に広がっていくということで、できれば最終的には観光とか医療系のビジターに対して追隨的にそういう付加価値をつけたサービスを提供するというので、全域の中で提供すれば東北としても潤いがある、あとは復興のアピールにもなりますので、誘客の促進にもなるということになります。

ちょっと話が変わりますが、人口の予測ということで、これはILCを核とした東北の将来ビジョンのほうで予測したものになります。建設の段階では大体8年ぐらいで6,500人程度ということです。これが運用の段階では1万人ぐらいの増になっていて、徐々にふえていくでしょうということです。この赤は、研究者、技術者の方々の様子です。大体10年間の建設の後半部分から、どんどんふえてきます。これはトンネル工事が終わって、その中に加速器、それから測定器の機器を設置する段階になりますと技術者の方がどんどんやってくるということでふえていきますという予測でございます。これはちょっと控え目につくっておりますので、こういう人数になっていくだろうということです。

それから、建設費ですが、ILCの建設費は試算では4,843億円ということです。これは7,700億円、今まで8,000億円と言われていたものをベースにしてつくってございます。8,000億円と言われていたのはこの7,700億円で、これをもとにつくりましたが、この中に測定器が含まれていない部分を足してつくっています。分類的には、機器、コンポーネントと土木工事と測定器ということで、7,700に1,000を足して8,743億円が設計計画費になります。3分の1ですね。3分の1というのは、欧州と北米とアジアという3局でそれぞれ3分の1ずつということなので、ざっくりと3分の1にしています。土木工事については、ホスト国につくられるので、これは100%、測定器も3分の1ということで4,843億円がILCの建設投資に絡む額ということで、これは公費、国の予算でということになっています。

この地域整備費は、これはILCとは関係なく、ホスト国が独自に整備するものになりますが、何せ何も無いところにつくりますから、ゼロからつくるということになりますので、少し値段が張っております。全体としては、整備エリアは518ヘクタールということ

で見込んで2,893億円ということです。この4,843と2,893を足すと7,736億円になります。ここから波及効果を算出して、いわゆる4.3兆円、雇用で25万人という数字になってございます。

先ごろ8,000億円というのがちょっと変更になりまして、8,300億円ぐらいかなというところで新聞に載っておりましたけれども、大体このようなところかと思えます。

7番目が技術と産業のイノベーション創出効果なのですが、これはちょっと枠組みということで利用者産業、加速器の技術を実際に利用している分野のところ、それから加速器を生産して提供している分野ということです。

それはどういうものがありますかというのがここに書いていますが、このようなところで波及効果のほうの色濃く出てくるだろうと思っております。研究用の加速器ですとか、産業用の加速器ですとか、医療用の加速器とか、そういうものがありまして、用途としてはこういう用途がありますと。あと供給側としては、こういう産業群に向けてつくってまいりますと。

東北でそのものを見ますと約6兆円の規模があると、これは統計の数字から持ってきているのですけれども、全体として見るとこの9.7兆円という産業の規模感から、恐らく加速器への影響が直接的になるのではないかというのを洗い出したのが6兆円ということです。

これで県別に見ますと、高いのが福島県です。次に、新潟県も入っているのです。山形県、宮城県、岩手県、秋田県、青森県というふうになりますので、このところはいろいろイノベーション効果の恩恵を受けられますし、そこに携わっていける要素を持っているということになりますので、その効果を十分に東北として受け取っていけるようにしていきたいなと思えます。

最後になりますけれども、ILC実現の意義ということで、これは実現した場合には紛れもなく東北の震災復興、それから東北の将来を再生する原動力になると思えます。その中でどういうものかということ、産業振興が図られますということで、建設段階、10年間のその活動によって東北の特に建設地域周辺への影響はとても大きくて、はかり知れないということになりますし、運用後もさまざまな活動がされますし、先ほどお話ししたような産業技術パークのような人と技術が集積するようなものを東北としてつくり上げていけば、なお波及効果を受けられるということだと思います。

それから、ILCの先端技術が大きな技術革新をもたらす可能性がありますので、このところをできるだけ我々の社会の中にある製品の中に落とし込むというところの見込みがつけば、どんどんイノベーションが進むということになると思えます。そういうものがどんどん花開いていくと、東北ブランドということになりますので、ぜひ今年度やっていきたいと思えます。

それから、できれば加速器産業というものを創出できないかということになりますので、これは日本としても非常に有効な産業になりますが、それが東北から創出されるというこ

との意義は大きいと思います。

あと雇用創出と、それから人材育成が促進されるということで、周辺地域で雇用が大分創出されていきますと。それから、東北ブランドの形成はもちろんですけれども、若手の人材の育成ということで、中高生を含めて国際化というものを見詰めながら I L C を身近に捉えられるということからすると、次の世代を担う人たちが育つということになると思います。そういう中では、雇用の場がつくられますから、若い方々がここに残っていただけるという場ができるということと、技術力向上の場ができますので、そこで技術と企業力を向上させるというようなことが起きてくるということでございます。人と技術とそういう企業の方向性がマッチすれば東北の発展につながるということなると思います。

この中では、地域が活性化されると書いておりますが、交流人口が相当ふえますので、その中で人の移動に伴ってさまざまな恩恵がありますので、このところはできるだけ限られた地域ではなくて、東北全域の中に人をやっていくということが効果を強めることになると思います。特に世界と交流できるという、相当大きなポイントがありますので、真の国際性が涵養されて、それによって東北が開かれた次の世代の東北をつくれるということにつながっていくと思います。

二つ目が、アジアに目を向けて、我々東北一本だけではなくて、アジアとも連携を深めるということが必要だと思いますので、できればアジアのイノベーションセンターになるような形で門戸を開いて取り組んでいくということが必要だと思います。

三つ目が、強いて言えば日本の再生になるということからすると、I L C は国際機関になりますので、国際的な公共財という位置づけからすると日本の価値そのものが高まって、そういう世界から見られることがつながっていけばよい、というふうに思います。

最後になりますけれども、ことしの夏までに国内の候補地が一本化されます。今立地評価会議のほうへの資料提出を準備しているところなのですけれども、それはそれとしてしっかりやりますが、今までやってきたことを続けてやっていくことが必要だと思います。I L C を正しく理解をしていただいて、地元の熱意をもって重要なものということです取り組んでいくということ、岩手県は十分だと思いますが、宮城県も含めて東北各地へ浸透させていくということが非常に重要なことだと思います。

そこで、東北が一丸となるために、I L C の効用を全域に広げていくということ、それから人と技術が集積しますので、それへの対応を東北全域で考えるということが必要になると思います。

これからもまた要望活動とか周知活動については積極的に密度を高めてやっていくことが必要と思っておりますので、御協力をよろしくお願ひしたいと思いますし、連携して取り組ませていただければありがたいと思います。ありがとうございました。

○郷右近浩委員長 有原先生、どうもありがとうございました。

それでは、これより質疑、意見交換を行いたいと思います。ただいまお話しいただきましたことに対して、きょうはとにかくもう全体、本当にさまざまところ、御講演いただ

いたわけですが、皆様から質疑、御意見等ありましたら、ぜひこの機会によろしく
お願いしたいと思ひますし、まず前段で御説明いただきました県の取組についてとい
った部分で、大平首席 I L C 推進監のほうへの質問もあわせてお受けしたいと思ひます。
皆様、何かありますでしょうか。

○飯澤匡委員 有原先生、きょうはありがとうございました。この間、宮城県でも佐々木
茂光委員と一緒に拝聴しております。

それで、まず最初に有原先生には意見ということになると思ひますので、後段で所感が
ございましたらお伝えいただきたいと。

最初に、県のほうから、この間岩手県の I L C 推進議連と宮城県の国際リニアコライダ
ー誘致議員連盟で合同で 2 班に分かれて要請活動をしてきました。それで、今まで国の正
式なプロジェクトとしてまだ認められていない。巷間伝えられているのは、やはり文部科
学省が予算の獲得と、それから今後科学技術に関する部分の恐らく予算の、お金の配分と
いうことになるのでしようけれども、I L C が決まるとひとり占めをされているのではな
いか、というような懸念があつて、なかなか積極的な姿勢が見られなかつたとも聞いてお
ります。

今回文部科学省を訪ねてみた場合に、逆にちょっと予想外な反応というか、前よりはち
よつと違つた印象というふうに、大平首席 I L C 推進監もそのような感想を述べられてい
ましたが、これまでずっと流れの中で文部科学省との折衝を通じて、今どのような状況で
あると推測されるのか、文部科学省の動きですね。最終的には国際的な、日本国だけでは
なくて、いろんな部分でお金の拠出というのはあるわけですが、やはり国の管轄部
門がしっかりとした姿勢を示していかなければ、このプロジェクトは物にならないと思ひ
ますので、今までフォローアップしてきた中での動き、今こういう状況にあるのではない
かというようなところをちょっとお知らせ願ひたいと思ひます。

それから、有原先生に私の一つの意見として、きょうは東北誘致の期待、取組というこ
とで、主に科学技術や、それからそれに関係するいろんな産業群の張りつけということで
お話をいただいて、これはやはり今まで東北がなかつたものについてどのような仕組みが
必要であるという観点からは、まさにそのとおりでと思ひます。

それで、この間の講演で思い出しておるわけですが、お話の中でやはりつくば市、
それから C E R N もそうですが、民間の企業群との結びつきがどうしても弱いという点、
これはしっかりグランドデザインの中でもっともっと具体化していかなければならない点
だと思ひます。

それと同時に、東北の今までの強みというのはやはり 1 次産業というのがこれは絶対
に見逃してはならない部分であつて、この国際科学研究都市ができるに当たつて、それを想
定しながらも、やはり 1 次産業の底上げというのをまさに世界から、東北の産物が世界に
そのよさというのが発信されるわけでございますので、その点についても今後いろんな情
報発信をする上で、これは必要不可欠な問題ではないかと思ひます。

それは、今まで長い間培ってきた産業の部分において、これはこれからも必要な部分であるし、それから今の非常に農業部分については逆風が予想されておりますけれども、あえてその中でしっかりとした足腰の強い生産体制をつくっていくのもこれは東北の課題であると思うのです。したがって、この I L C を軸に国際研究都市が形成されるということと同時に、先端科学だけではなくてその部分の底上げというものを何かの形で言及をしていかないと、周辺の方々の協力体制というか、もっとそうすれば実のあるものになっていくのではないかというふうに思います。

それで、今回研究者の居住も恐らく分散型になるということが予想されていますので、ある 1カ所に閉じ込めるという形ではなくて、そうしますと地域社会との密接なかかわり合いということになれば、さっき言った農業だとか地元の産業という部分に必ず結びついていきますので、そこら辺のストーリーをもう少しうまくできないものかなというふうに私は常々思っているわけでございます。

やはりこれからの 21 世紀型の科学研究都市というものを展望すると、CERN にしたって 50 年以上の歴史があるし、つくばにしたって長い間かけてやってきましたが、吉岡東北大学客員教授もおっしゃっていましたが、どうしても地域社会との隔絶というのが大きな課題でもありましたので、これはもうぜひ絶対に今までの教訓を生かしていかなければならない。と同時に、やっぱり自然との共生という部分、これをもう少し研究都市の創設に当たっては、東北ならではの私は非常に強みだというふうに思うわけですが、今後その協議会の中でいろいろな取組がなされると思います。経済団体、または産業界が中心になってきていますが、ぜひともこの部分についても御検討いただいて、より厚みのある国際研究都市の創設に向けた取り組みを期待したいと思っておりますので、御所見があればお伝えいただきたいと思います。

○大平政策地域部副部長兼政策推進室長兼首席 I L C 推進監 文部科学省の動きということでございますが、一部推測も含めてお話申し上げますと、まず技術とすれば、先日の要望活動のときもお話が、文部科学省の中に福井文部科学副大臣をヘッドとするタスクフォースができていたということがございます。ただ、そのメンバーがどのようになっているかはわかりませんが、いずれこれは省内のタスクフォースということだと思います。I L C の誘致に関する課題などを戦略チームで検討しているということだと思います。内容については具体的にはわかりませんが、推測するにということでもあります。

あとは、文部科学省を中心に外務省、経済産業省、内閣府などとの連携をすべきであるということを外部の有識者の方など、あるいは研究者の方々が盛んに話し申し上げておりますので、次の動きとすれば文部科学省が中心になりながら、例えば総合科学技術会議を所管しますのは内閣府でありますので、そちらのほうの、具体的には山本一太特命担当大臣などとの連携というのがこれから出てくると思います。さらに、山本大臣のほうも I L C に前向きな発言をしているというふうな情報もございます。それらは研究者の方から聞いた話ですけれども、ということで、総合科学技術会議などとの連携が図られな

がらいくのではないかと考えてございます。

そのようなこともありますし、あとは外的なお話を申し上げますと、ヨーロッパがもう積極的であると。財政負担の話は別にして、ヨーロッパがかなりEU政府など巻き込んだ上での動きということが出てくるといことが予想されます。さらに、アメリカにおいても今月末に日本からアメリカに行ってワシントンDCでシンポジウムを行うということがありますので、そういうネゴシエーションの活動を行っておりますので、アメリカも何らかの動きが出てくるといことになれば、日本の価値というのが見えてまいります。今まではITERとか、先ほど紹介ありましたけれども、ITERでは六ヶ所村とフランスのカダラッシュというところが争って最終的にはフランスになったということで、文部科学省は負けたということがかなり痛手になっておたわけですけども、今回は価値が見えてくるといことになれば、積極的な姿勢ということが出てくるとい思います。あとは、類推するに、省庁の主導権争いというのもこれからあるいはもしかして出てくるのかもしれない。それは私の個人的な感想でございます。

○有原常裕講師 御意見ありがとうございます。生活環境をどのようにいとか、地域に溶け込んでいただくいような生活環境をつくりたいいようなことで議論のあつたのは、例えば食材をできるだけ地域から調達をして、例えば旬な食材をスーパーマーケットとかで販売するときレシピをつけて、日本ではこのいような料理で、こんな形で季節を楽しみますいような、いようなサービス提供がいいのではないかいようなことはありましたけれども、いようなところはまだまだ議論いとか、調査の検討が不十分でございますので、御意見を参考にさせていただきますして、東北の良さいようなものをしっかり伝えていくとともに、海外の方々のいような食文化とか生活環境ともできるだけ融合してもらって溶け込んでいただいて、我々も勉強するのですけれども、彼らにもいしっかり日本のものを伝えるいような、工夫しながらつくっていきたいいと思います。ありがとうございます。

○飯澤匡委員 CERNとの比較がいろいろなされるわけですけども、きょう御提供いただいた資料の中にもCERNがまず最初できたのと、どんどん、どんどんメインキャンパス自体も拡張、拡張でできてきたと。やっぱり手狭な印象いというのは、実際に行った人たちもいようなふうに言っていますし、ですからメインキャンパス自体も少し今までの既存概念からもちょっと離れたいような形で検討する必要があるのではないかいようなふうに思いますし、私も実際CERNのカフェテリアで食事しましたが、中庸な洋食の外食いような感じで、おいしいと言ったらいいか、おなかは満たされるのですけれども、それなりの食事だと。まさしく東北の食材、その種類、質からして、間違いなくこれは2段階ぐらい私は上だと思っておりますので、食いというのも研究者にとって大事な視点でもありますから、そこは九州も同じいようなことは言うのでいしょうけれども、よりもう少しそこら辺の複合いといいますか、これは2次的な部分になると思うのですが、ぜひとも考慮していただいて、そこら辺も大いに今後検討材料としていただきたいいと思います。これは御意見とさせていただきます。

たきます。

○**工藤勝子委員** ことしの夏までに国内の候補が一本化されるという話であります。私もこの間文部科学省のほうにも行ってきたわけですが、その中で先生からお話ありましたように、地元の熱意がやっぱり一番大事だという話をされました。

そこで、昨年度、平成24年度ですけれども、県内の各市町村から5項目ほど市町村要望を調査して歩きました。その中でILC関係の要望をしてきたのが一関市だけだったのです。あとの32市町村からはILCという要望が出てこなかったわけでありまして。そうすると、奥州市と一関市だけがある程度今盛り上がってきている段階なのですけれども、ではあとの県北地域だとか沿岸とか、そういう地域、まず岩手県としてそういう熱意を盛り上げていくために、大平首席ILC推進監に聞きますけれども、今後どういう働きかけを各市町村に投げかけていくかということも非常に大事ではないかなと。

私は、遠野なのですけれども、遠野市長さんと懇談会しても、ちょっとILCはね、というそういう一歩置いている部分があるのです。それではだめだと、大体遠野の近くまで穴を掘ってくるのだからという話をしているわけですが、なかなかそういう関係で岩手県自体の各市町村もまだこれに対して盛り上がってこない部分がある。

それから、前にいただいた講演会の資料を法人会のほうに投げかけました。やはり今後企業がいろんな形の中で非常に経済の効果があるのだという話をいたしました。そうしますと、では何が生まれてくるのと素朴な質問でした。何が生まれてくるのですかと、こういう多額のお金を使って研究をして、そこからどういうものが生まれてくるのか。例えば福島県原発の放射線がそれをやったことによって消すことができるのですかというような話も出てきたわけですが、きょうのこの24の中にありますように、多分右側のほうに、これ小さい字で眼鏡をかけて見たのですけれども、こういう効果が出てくるのではないかなというようなことがちょっと具体的に出てきておりますので、もう少し各企業、県内企業を含めて、東北の企業も含めて、こういう部分をもっと、こういうものが生まれるのですよというようなことも、まちづくりもそうですけれども、では企業に対してどういう経済効果が出てくるかというようなことをもうちょっとPRすべきではないかなという思いを感じたところでもあります。

岩手県の子供たちがほかに、東京なんか就職しなくてもいいくらいの雇用が生まれるのだという話をしているのですけれども、みんながそれに対してなかなか想像もつかないという段階でもあります。そういう中で、今後先生がこういう企業に対してどういう働きかけをしていくのかなと思って、ここを聞いてみたいと思いますし、岩手県もそうですが、今後青森県、秋田県、山形県、ちょっと一歩退いているそういうところに対して、岩手県、宮城県としてどういう働きをしていくのかということをお聞きしたいと思います。

○**大平政策地域部副部長兼政策推進室長兼首席ILC推進監** 県全体、候補地以外への働きかけなどの御質問でございますが、まず昨年度末以来、宮古市、釜石市、大船渡市でILCの講演会を実施しております。これは商工会議所対象でございます。

今年度の事業といたしましては、岩手県が県 I L C 推進協議会と協議しているところでもありますけれども、マインツ大学の齋藤先生という方が昨年震災、一般社団法人 S A V E I W A T E の関係で沿岸で事業をされております。その中で I L C についても触れられているということで、今回 C E R N に行ったミッションのメンバーが最終日に齋藤先生にお会いして、フランクフルトでお会いしております。その前からお願いしておるわけですが、ことしもお願いしたいと、今回は S A V E I W A T E さんの事業ではなくて、県の I L C 推進協議会が招聘するという形でできないかということで現在調整しております。したがって、それは沿岸を中心に前出授業という形で、I L C をもう少しメインにした形でお願いしたいと思っております。その中で子供たち向け以外にもできないかということも検討してまいりたいと思っております。

あとは、県の協議会の事業で今確定しておりますのは、釜石高校で I L C の講演会を行うと。昨年度は盛岡一高と盛岡三高で行っておりますが、要望があったのが黒沢尻北高校と釜石高校でありましたので、今年度はどちらの学校でも行うということとしております。

あとは、我々が今さまざまな依頼を受けておりますので、これらについては今まではどうしても奥州市、一関中心になってきたわけですが、我々のほうから積極的に働きかけて、沿岸部あるいは内陸部、県北部でも講演会を開催させてまいりたいと思っております。

あと、昨年東北 I L C 推進協議会のほうで東北ビッグバンという 22 分物の DVD をつくってございます。こちらのほうは、県 I L C 推進協議会で 1,000 枚買い上げまして、全小中学校に本年度配布いたします。昨年度につきましては、全県立高校、支援学校について配布しておりますが、これに加えまして市町村立の小中学校についても全校に配布することとしてございます。

子供たち中心になりますけれども、あとは市町村にも DVD を配布してございまして、例えば盛岡市役所ではロビーでその DVD を上映中でございます。そのような活動が各市町村なり公民館とか、そういうところでもできないかということで、これからは各市町村にはお願いしてまいりたいと思っております。

あと東北の協議会の事業については、有原さんのほうからまたあるかもしれませんが、昨年度については山形で講演会も年度末に行っておりますので、これを秋田県なり青森県なり、そういうことでやりましょうということで有原部長ともお話ししているところでございます。

あと有原さんのほうからも東北の I L C 推進協議会での企業向けのお話というのが出るかとは思いますが、岩手県の中では岩手大学の中に I L C 推進会議というのがございますのですが、そちらのほうと連携しながら企業向けのセミナーができないかとか、東北大学の客員教授の吉岡先生が K E K から席を離れて、きょうの I L C 東北誘致議員連盟の総会で講演されるわけですが、吉岡先生は 4 月 1 日から岩手大学の客員教授にも就任していただきまして、まず立地の評価のほうが一段落したならば企業さん向けのセミナーみたいなものを岩手大学と連携しながらできないかということで岩手大学のほうともお話し

ているところでありますので、東北大学の席と岩手大学の席をいただくということでもありますので、そういう活動も行いながら企業さんとのセグメントとか、マッチングとか、そういう具体的な活動にちょっとかじを切って、立地の動きを見ながら、見直しながらということにはなりますが、そういうことを想定しています。

○郷右近浩委員長 今大平首席 I L C 推進監のほうから盛岡市役所のお話があった D V D につきましては、本日の I L C 東北誘致議員連盟の際に皆さんのほうに配布になる予定となっているということでございますので、また改めて案内があると思います。

○有原常裕講師 二つほど御指導いただきまして、ありがとうございました。産業、企業への技術は一体どういうものが我々企業に恩恵があるのだと、この点と、東北全体に広げていくということだと思えます。これは、私どもにとっても非常に大きな課題でございます。加速器という言葉自体がなかなかまたになじんでいる言葉ではないものですから、技術そのものがいろんな製品の中に取り組みされていたり、加速器を使ったものでつくったものがあるとか、さまざまな形で社会に浸透はしているようなのですけれども、一体それはどういうものなのだというのがなかなか説明するときには具体性があつたほうがいいというのはわかっているのですが、我々も実はそのところをひもとけていなくて、非常に大きな課題だと思っております。

そこは、先ほど大平首席 I L C 推進監さんのほうから言われたように、K E K のほうで技術開発をされていて、それが加速器の技術の開発と、それから加速技術を開発するに当たって民間の方の技術をもらってきてというか、それを借りて技術開発をしているものですから、非常に接点が深いのが K E K の技術のところですね。あそこには工場みたいなところもありまして、非常に町工場的な雰囲気があるセクションもありまして、非常にそういう加速器の技術とつながりが深いところなのですが、それを一般の人にわかっていただけのような説明は実際のところ我々もできていませんし、一体どうやったらいいのかなというところが本音のところですので、これから勉強もさせていただきますけれども、多分早いのは先ほどお話あつた吉岡先生から教えていただくのが一番早いと思えますし、あとは K E K の中でのそういうことを担当されている方から聞くというのが早いと思えます。そういう内容をまとめて皆さんにお示しできれば、それを見た企業の方が自分の会社ですところいうところに関連があるのだなというところにお気づきいただけるかなというふうに思いますので、そういう取り組みをさせていただきたいと思えます。

それから、なかなか浸透は東北全域にしていないというのが事実でございます。I L C の講演会を先月山形でやってまいりましたけれども、福島県とか秋田県、青森県についても働きかけはしております。タイミングというか、時期とところ合いを見計らつてということなのですが、ただ I L C だけの講演会になるとなかなか開くほうのハードルが高いようなので、その地元の話題性のあるものと I L C をくっつけてやることにしております。山形県では、放射光と I L C は技術的に似たようなところがあるので、そういう組み合わせでやりましたので、そのほかの県についてもまず I L C の講演会をやるために地域の話

題性のあるものとセットでやろうということでこれからの取り組みであります。よろしく
お願いします。ありがとうございます。

○柳村岩見委員 4月12日に誘致活動、要望活動で、私は内閣府と経済同友会が担当だ
ったわけですが、感想として、内閣府はやるということでありますと国家予算的には文部
科学省、内閣府には倉持政策総括官がおられているわけですけれども、実際に国家予算を
拠出して動いていくといったときは文部科学省に。文部科学省というところは、もう元来
予算に対して非常に弱腰なところだというお話でした。その予算に対して、国家予算に
対して獲得意欲と根性と、たんかというのは余り切らないところだ、こういうことで、非
常にじれったいですよねという。国で決議なり誘致の宣言をしてもらいたいと、いまだに
日本政府としてそれがなっていないよと質問すると、そういう答弁が返ってくるとい
うことが一つ。

それから、経済同友会の前原専務理事は、数カ国でもう半分辞退と。もう日本さん、ど
うぞといわんばかりのことが結構あるのですよというお話をされて、それどこの国かとは
つきり言わないところがみそなのですが、EUという話はされました。経済もこういう状
況でありますので、EU加盟国ではもう下りられているという実感を耳にされている。大
平首席ILC推進監、そこどうですか。

○大平政策地域部副部長兼政策推進室長兼首席ILC推進監 経済同友会でのお話は、ヨ
ーロッパの将来ビジョンをつくっている中で、最初冒頭にも若干お話し申し上げましたが、
欧州高エネルギー物理学将来構想というのが、これは政府も入るということでありますが、
それで研究者のコミュニティの中ではまずフランスがもう最初から、去年の段階で日本に
ということ、それが広がってEUの中で日本がILCのホストになることを歓迎し、欧
州は参加したいと強く考えると、日本政府からのプロポーザルを期待するという表現が盛
り込まれております。6月には政府レベルでの最終決定になると。同様のことをアメリカ
にもお願いしたいということで、今動いております。

ただ、一方、ホストになることを歓迎するということでありますけれども、それには欧
州が参加したいと、その参加するスキームになると思いますが、お金をどの程度出して参
加するのか。もちろんお金を出さなければ参加できないわけですので、例えば日本はLH
Cの研究に、LHCというのは5,000億円で作られているのですけれども、それに日本
が約百数十億負担しているために日本が研究に参加できて、日本チームが常駐している
ということになりますので、何らかのものはあると思っておりますけれども、お金の問題もあると、
これも外交問題になりますので、学術研究組織だけではなくて、例えば別な産業の問題だ
とか、TPPになるかわかりませんが、いろいろなもの、そういうようなものを含
めた外交という選択の問題になると考えてございます。

○有原常裕講師 同じでございまして、聞こえてくる話は、研究者の中ではもう日本でや
ってもらいたいというふうなことを言われている。これは昨年7月にヒッグス粒子が見
つかりましたというのを受けますと、今LHCのほうでバージョンアップをしております

が、それが大体研究をし尽くしたころには I L C をつくりたいということからすると、もうそろそろ決定をして動かないと、LHCの次の I L C にスムーズにつないでいくことができないのです。そうすると、なかなか研究したいのにできないねということになるので、もうすぐに仕事をやりたいという場合には、やれるのはもう日本だろうということで、多分そういう世界の流れ、風が吹いているのではないかなというように思います。

○郷右近浩委員長 ほかに何かございませんでしょうか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○郷右近浩委員長 私のほうからも1点、と思います。

といいますのは、やはり先生のほうから交通ネットワーク基盤の御説明もいただいたわけですけれども、その部分で岩手に対してのイメージというのがやはり山というような、恐らく関東であったり、世界から見たときに、そのときに山地というか、まさに北上山地でもあるのですけれども、そうしたイメージの中でやはりそこと、結局当初から九州のほうでは福岡という名前が出てくる中で、アジア圏の中での都市というような、そうしたものの対比というのは、すごく私自身ある意味クローズアップされているのかなというふうに思いました。

ただ、もちろんその中では仙台という、こちらのほうも仙台であったり盛岡というような部分がある中においてなのですけれども、やはり外国のほうから来られた研究者の方々に対して、イメージを変えていっていただかなければいけない、発信をしていかなければいけないという部分もあるし、これはどっちが先かの話なのですが、I L C をぜひ岩手というか、この北上山地で何としてもなし遂げてもらいたいのだと、形づくってもらいたいのだといったものができたときには、今度は逆にそのこと自体がさまざまな今震災関連の復興の中で産業の拠点づくりとか、研究拠点をつくろうとしている東北にとって追い風になってくるというふうには思うわけであります。そこら辺を結びつけていくような部分の考え方というのについて、先ほどもちらっと先生には触れていただいておりますけれども、先生のお考えというか、いただければ。

○有原常裕講師 福岡と比較をされまして、福岡空港のすごさというところは実際そのとおりでございまして、脊振山地自体も福岡から結構近いところにありますので、印象としては世界から来る場合の利便性が高いというふうに思われておりますけれども、空港までは全くそのとおりのことです。ただ、空港においてから現地に向かうとか、あるいは生活の中でどういうふうにやるかという、その動きというのを見るとそんなに変わらないわけです。そんなに変わらない上に、逆に北上のほうはいろんな道路とか新幹線のルートに並行して通っているのですけれども、九州のほうは新幹線は直行して、さよならみたいに行くような新幹線ルートだったのです。ということからすると、相当こちらの利便性はいいので、ただそこを文章化して打ち出せていないということだと思いますので、そこはしっかり伝わるようにしていきたいと思いますが、何せ北上山地という山の名前が出た途端にすごい山だろうと。東北にある山だから、これはすごいのではないかなというふうなイメー

ジ先行がちょっとありまして、そこは少し払拭していきたいと思います。山といっても里山で、しっかり皆さんが暮らしていらっしゃるから。脊振山地のほうは、どちらかというとなんて険しくて、生活されている方の数もこちらよりは断然少ないのではないかと、いうふうな印象を持っておりますので、そういうところで打ち出し方のまずさというのがあると思うのですが、そこをしっかりと出していきたいですし、あとは海外の研究者にもそういう利便性を、成田空港、羽田空港においたら、しっかり新幹線で2時間もあれば現地へ到着して、そこからすぐ近いですよというようなことを印象づける、あるいは仙台空港なり花巻空港においてももうすぐ近くにありまますというようなところを生かしていく必要があるのかなと思います。

そういう意味では、先ほどもお話ししましたけれども、接続の利便性ですとか、今あるものでもいいのですけれども、そこをしっかりと、来たらこの接続で行ってください的なサービスの部分ですね。いろいろ調べてどうしたらいいのでしょうかということではなくて、インターネットを見ると、例えばこの交通の接続がしっかりできるとか、インターナショナルスクールとか、地域ではこんなことをしていますというふうな情報発信を今からやっておく必要があると思います。

○郷右近浩委員長 ありがとうございます。

では、ほかはないようでございますので、本日の調査はこれをもって終了いたしますけれども、今後とも先生にはまた実現に向けて、これからますます厳しいスケジュールになってくると思いますけれども、お力添えをいただくことをお願いいたしまして、有原部長、本当に本日はお忙しいところありがとうございました。

〔拍手〕

○郷右近浩委員長 それでは、委員の皆様には次回の委員会運営等につきまして御相談がありますので、しばしお残りいただきますようお願いいたします。

次に、6月に予定されております次回の当委員会の調査事項についてでありますけれども、皆様方から御意見等はございますでしょうか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○郷右近浩委員長 今後のスケジュールにつきましては、6月4日の県内調査、そして8月7日の閉会中の参考人招致、そして9月の取りまとめとございますけれども、特に御意見がないのであれば国際リニアコライダーの県内の建設候補地への現地調査を行いたいと考えておりますが、当職に御一任願いたいと思います。これに御異議ありませんか。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○郷右近浩委員長 異議なしと認め、さよう決定いたしました。

次に、8月7日に予定されております次回の当委員会の調査事項についてであります。御意見等はありませんでしょうか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○郷右近浩委員長 特に御意見等がなければ、当職に御一任願いたいと思いますが、これ

に御異議ありませんか。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○郷右近浩委員長 異議なしと認め、さよう決定いたしました。

以上をもって本日の日程は全部終了いたしました。本日はこれをもって散会いたします。
どうも御苦労さまでした。